

熱中症

児玉 寛嗣

日曜日の朝、外は真夏の太陽が照りつけている。一週間前に行われた都知事選のテレビ番組を見ていた時のことだった。立ち上がるとふらふらする。気の所為だろうと椅子に座り直す。だんだんと気分が悪くなり、椅子に座るのがきつくなる。横になれば治るだろうと横たわる。冷や汗が出てめまいがする。吐き気を催すようになる。立てないので這ってトイレに行っておう吐。ようやく事の重大さに気付いた。あいにくと妻は前日から次女の家に行っていない。夕飯をすませて戻ってくるので帰宅は夜だ。家には自分ひとり。幸い、意識ははっきりしていた。携帯電話まで這って行き、近くに住んでいる長女を呼び出す。「買物に出ているので少しかかるがそちらに向かう」との返事。二十分くらい待たせようか、長女が駆け付けてくれた。居間に入ってくるなり「エアコン、つけてないの」と行って、窓を閉めてエアコンをつけた。そう言えば、前日、エアコンをかけずに寝たのだった。

日曜で病院はやってない、救急車を呼ぶしかない。娘の電話で救急車が来る。救急隊員が家に入ってくる。問診や検温などの後、エレベータが狭いため車椅子で一階まで降ろされ、担架に移されて救急車に運ばれる。救急車には長女が同乗する。救急隊員が次々に病院に電話して病状を説明する。幸運にも三軒目の病院で受け入れてもらえるとの事。救急車が発車して目線の違う景色が窓から見る。病院に着くとすぐに女医さんの簡単な診察。「軽度の熱中症」と言って看護師に点滴を命じるだけ。重症だと思っていたのに軽くあしらわれて不安を感じる。

ベッドに横になって二時間ほどかけて生理食塩水らしき点滴を二本受ける。妻も次女も駆け付ける。点滴の後、起きるとめまいも吐き気もほぼなくなった。二、三日で後遺症もなく元に戻った。「都内で〇〇人が熱中症で救急搬送された」との報道を見るたびにこの日のことを思い出す夏であった。これ以降、エアコンは欠かさなかった。